

變思堂雜錄

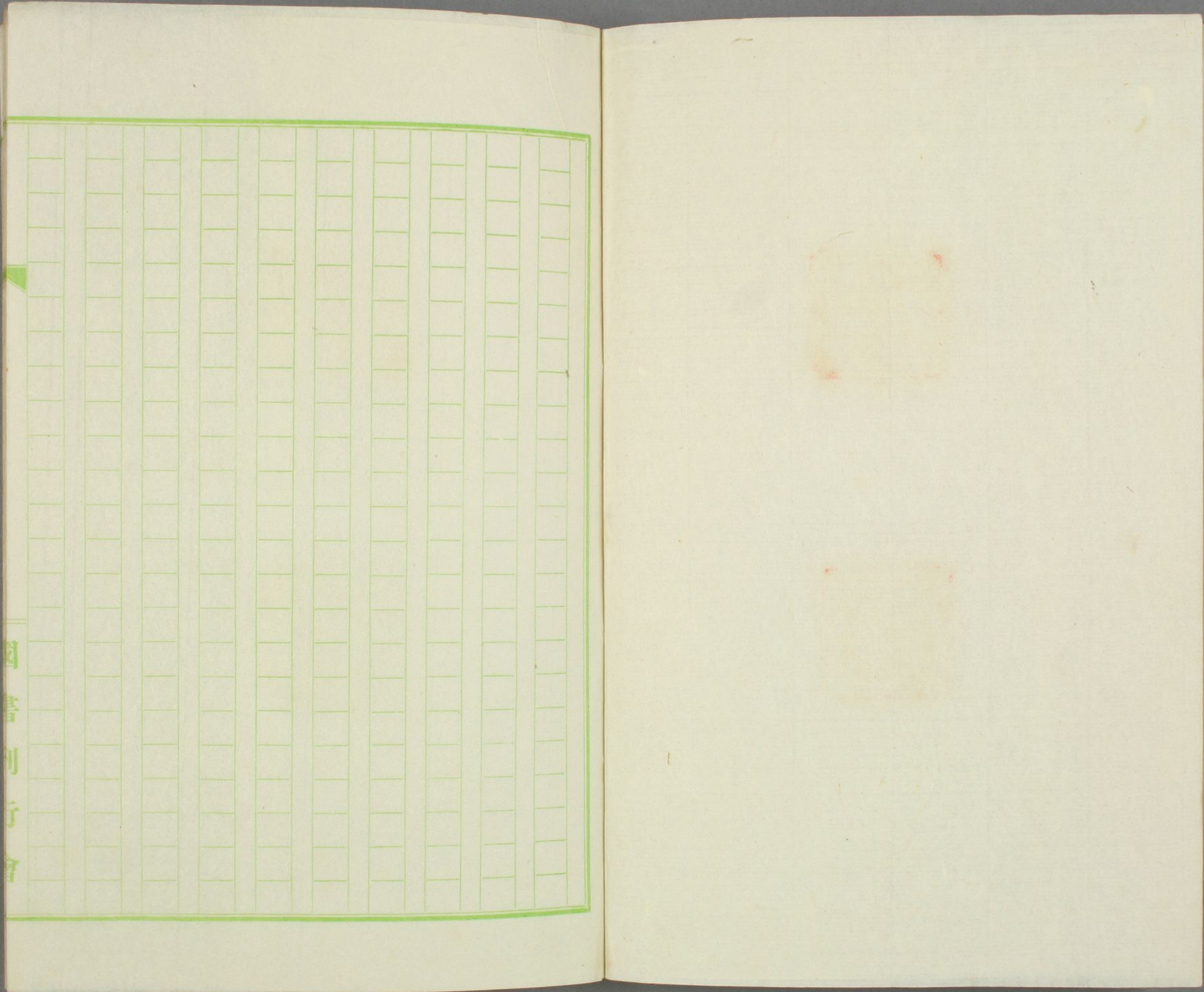
九

明治四十三年六月上流

特別
14
1919
248







圖書刊行會

早稻田大學圖書館主催 能樂源流表彰會展覽會出品目錄 明治四十三年六月五日開催

第一部 圖書

176523

猿樂傳來	一冊	德川(田安伯爵家
猿樂傳記	一冊	
重猿樂傳記	五冊	
猿樂分限帳	一冊	
申樂叢書	一冊	
申樂叢書 文祿年間禁申御能組	一冊	
申樂叢書 裝束並作り物	一冊	
能之作書條々	一冊	
實鑑抄	一冊	
謠曲歌嘉留多	二冊	
散樂叢書	一冊	
觀世流作り物		
狂言	八冊	
狂言裝束附	一冊	
驚流狂言	四冊	
大藏流狂言名寄	一冊	
喜多謠曲	二冊	
謠曲百番	二十冊	
彩色繪謠書入アルモノ		
太鼓開書	一卷	
細川幽齋公直筆	寫本	
觀世與左工門より片山又十郎へ傳書		
御能組	一軸	
細川三齋公直筆	寫本	

一謠本	七十四冊	伊達(仙台伯爵家
一奧書		
一謠本	百冊	
一卒都婆小町謠本	一冊	
一宴曲抄	一冊	
一卯月本	百冊	
一喜多流仕舞付	百冊之内	
一明和謠曲草案	五冊	
一改正本		
一謠註甲集	二十冊	
一古活字本		
一舞正談猿轡	萬治年	
一應返答猿轡	元祿年	
一能之衣裳	元祿年	
一能之圖式	元祿年	
一五尺手拭	元祿年	
一風流謠年代記	一冊	
一能舞之圖	寫本	
一豐公能留書	二冊	
一時代能留書	二冊	
一古抄本影寫本		
一併度曲集	一冊	
一豐島貞利編	享和年	
一能舞考	寫本	

一新能繪圖 寫本 一枚 同
 一謠鈔 十冊 同
 一德川幕府書類目錄中能一件 寫本 二冊 同
 一觀世大夫拜借金一件 寫本 一冊 同
 一寶生大夫勸進能一件 寫本 一冊 同
 一勸進能一件 寫本 三冊 同
 一笠著の評 三冊 同
 一幸正能口傳書 寫本 一冊 同
 一秦曲正名問言 二冊 同
 一勸進能手控 寫本 一冊 同
 一觀世流謠曲 一冊 帝國大學圖書館
 一謠抄 元和版
 一謠抄 光悅本 九冊 同
 一謠肩書 天和三年 一冊 同
 一喜多仕舞付百番 二十冊 同
 一舞樂葉葉大全 七冊 同
 一舞樂大全 二十二冊 同
 一河合和房 貞亨四年 同
 一舞樂秘曲大成 三冊 同
 一題簽(能之圖式) 正徳五年 同
 一真謠 元禄二年 三冊 同
 一秦曲問言上解 一冊 同
 一當問仕舞付 五冊 寶曆十四年
 一うたひあひの本 二冊 同
 一萬治二年 同
 一能辨惑大全 五冊 同
 一高田平七 元文五年 同

一舞正語磨 三冊 同
 一謠曲 刊本 十三冊 同
 一謠曲 貞亨三年 二十冊 同
 一謠曲 元禄二年 二十冊 同
 一謠曲書誌 三冊 同
 一謠五音之次第 一冊 同
 一樂語秘闕抄 一冊 同
 一狂言全書 寫本 六冊 同
 一狂言問 寫本 三十六冊 同
 一謠鈔 欠本 一冊 中野完一氏
 一喜多家祖先畫像 一軸 喜多六平太氏
 一面裝束名寄小道具類寸法 一冊 同
 一忠度 近衛龍山公筆 同
 一謠本 五冊 金剛鈴之助氏
 一豐太閣御朱印付御沙汰書 一卷 同
 一光悅本 百番之内 十一冊 同
 一卯月本 元和年 七十冊 同

一女部花 一冊 同
 一觀世流謠曲 四冊 同
 一當流拾遺大成 二十冊 同
 一猿樂考證十代 九冊 同
 一音曲玉淵集 五冊 江嶋伊兵衛氏
 一能管 千もの雲 寫本 九冊 同
 一極秘能辨惑大全 五冊 同
 一童舞抄 五冊 同
 一花傳抄 八冊 同
 一謠訓蒙圖繪 五冊 同
 一喜多流謠本古版 四十卷之内
 一喜多流謠本 二冊 同
 一金春流太鼓頭附 一冊 同
 一五色謠抄 木活字本 十冊 同
 一進藤流謠本 十二冊之内
 一謠曲書誌 十冊合本 二冊 同
 一觀世左近大夫入道章句 寛永六年卯月
 一觀世左近大夫黒雪筆 題簽片桐石見守貞昌筆
 一古筆了仲折紙附
 一謠五十番、諷五十番、外字多飛捕、曲舞集
 一謠曲百番 明暦年 二十冊 黒川眞道氏
 一謠曲百番 寛文年 二十冊 同
 一謠曲百番 寶永年 二十冊 同
 一當流拾遺大成 二十冊 同
 一元禄年 同

一觀世左近大夫入道章句 寛永六年卯月
 一觀世左近大夫黒雪筆 題簽片桐石見守貞昌筆
 一古筆了仲折紙附
 一謠五十番、諷五十番、外字多飛捕、曲舞集
 一謠曲百番 明暦年 二十冊 黒川眞道氏
 一謠曲百番 寛文年 二十冊 同
 一謠曲百番 寶永年 二十冊 同
 一當流拾遺大成 二十冊 同
 一元禄年 同
 一觀世流謠本 廿冊之内 二冊 同
 一謠曲拾葉抄 廿冊之内 二冊 同
 一觀世流謠曲 十二冊 同
 一唯謠鼓覺集 五冊 同
 一觀世流小謠百番 二十冊 同
 一元禄十五年觀世太夫一代能番組 一軸
 一元禄十五年九月 於内野七本松觀進能 檜 常之助氏
 一浮舟 光悅本 一冊 同
 一佛の原 卯三本 一冊 同
 一融 寛永大本 一冊 同
 一兼平 一冊 同
 一觀世流謠本 寛文四年五月
 一謠曲書誌 五冊 同
 一舞樂秘曲大成 一冊 同

一 今泉謠之抄 一冊 同
 一 牛田治郎 一冊 同
 一 諷題揃 一冊 同
 一 諷千鳥番目録 寫本 同
 一 明和改正本 四冊 同
 一 目録 九祝舞、内外 同
 一 便用謠 一冊 同
 一 初心仕舞附 一冊 同
 一 喜多七大夫古能 寫本 同
 一 謠引歌 一冊 同
 一 木村重長編 寫本 同
 一 觀世 謠本奥付集 寫本 一冊 同
 一 大藏流狂言問語 寫本 一冊 同
 一 天保觀世流謠本 初摺 一冊 同
 一 改正觀世流謠本 天保十一年再板 同
 一 觀世大夫織部 天保十一年再板 同
 一 新撰小謠朗詠集 一冊 同
 一 大成 芝々堂編 瑞午亭校 天明四年正月 同
 一 舊謠いろは名寄 一冊 同
 一 狂言問語 古寫本 一卷 饗庭篁村氏
 一 謠冊四季上哥十曲 一軸 觀世鐵之丞氏
 一 觀世黑雷筆 觀世大夫黑雪筆謠本一冊 觀世元規氏
 一 鶴謠 鳥の子紙表紙裏金 黒雪は觀世宗家九代目にし
 一 慶長頃名人の稱ありしものなり
 一 伊達政宗公書翰 一通 同
 一 慶長年間六代目觀世左吉重次宛勸方勸告書 同
 一 御能組 二枚 葛野春雄氏
 一 京都御所に於ける御能 同
 一 古番組寫 一冊 同

第一部 能具 第一 衣裳

一 唐織衣裳 二枚 細川侯爵家
 一 年代江戸初期 池田(岡山)侯爵家
 一 唐織衣裳 一枚 池田(岡山)侯爵家
 一 機標 赤淺黄茶段龜甲織紋金青海波
 一 色々糸にて菊の折枝縫裏織紅梅
 一 厚板衣裳 一枚 池田(岡山)侯爵家
 一 機標 大格子海松色段色々糸にて雲織紋裏淺黄補
 一 狩衣紺地蜀江錦袷 一枚 前田子爵家
 一 唐織金地芭蕉葉蝶模標 一枚 同
 一 大口白地龍田川模標 一枚 同
 一 唐織 一枚 藤堂伯爵家
 一 萌黄地屋形人形模標 同
 一 唐織 一枚 同
 一 紅白黒段菊秋模標 同
 一 唐織 一枚 同
 一 無地金大菊模標 同
 一 唐織 一枚 同
 一 萌黄地立涌桐鳳凰模標 同
 一 縫衣裳 一枚 同
 一 赤地菊青海波折枝菊縫箱模標 同
 一 縫衣裳 一枚 同
 一 白地扇切子伏縫箱模標 同
 一 厚板唐織 三枚 池田(鳥取)侯爵家
 一 唐織鳥獸盡縫衣裳 一枚 喜多六平太氏
 一 縫ひつぶしと稱するものにして縫らずに縫とりせらるも
 一 厚板 二枚 寶生新氏
 一 狩衣 二枚 同
 一 側次 一枚 同
 一 半切 一枚 同

一 唐織赤地牡丹に蝶模標 一枚 淺野總一郎氏
 一 狩衣紺地法螺貝模標 一枚 同
 一 狂言唐人裝束 一枚 同
 一 引廻し 一張 同
 一 蜀紅錦 義滿公拜領 一枚 寶生九郎氏
 一 獸盡縫箱 祖先傳來 一枚 同
 一 片身替蜀紅錦 一枚 同
 一 秀吉公拜領 同
 第二 一面
 一 三光 出目満永作 一面 伊達(仙臺)伯爵家
 一 三光 出目榮滿作 一面 同
 一 三光 是閑時代 一面 同
 一 三光 作不明 一面 同
 一 小面 一面 同
 一 井關河内滿徳作 同
 一 小面 出目半藏作 一面 同
 一 平太 出目満永作 一面 同
 一 泥眼 一面 同
 一 出目元休滿茂作 同
 一 雷 出目元休滿綱作 一面 同
 一 山姥 一面 同
 一 金春七郎泰氏照作 同
 一 雷 尺鶴作 一面 藤堂伯爵家
 一 三光尉 一面 同
 一 慈童 友閑作 貳面 同
 一 小癡見 一面 同
 一 姥 接待ノ場 源介作 一面 同
 一 惡瘤尉 友閑作 一面 同
 一 深井 貳面 同

一 眞角 一面 一面不詳
 一 曲見 一面 同
 一 平太 一面 藤堂伯爵家
 一 十六 二面満水 二面 同
 一 瘦男 是閑作 一面 同
 一 中將 天下一是閑作 一面 同
 一 般若 一面 同
 一 大癡見 一面 德川(田安)伯爵家
 一 八代將軍吉宗公遺愛 直筆毛書之面 同
 一 白藏主(釣狐) 一面 細川侯爵家
 一 狐(武體) 一面 同
 一 通圓 一面 同
 一 乙 一面 同
 一 猿 一面 同
 一 啞吹 一面 同
 一 けんとく 一面 同
 一 萬媚 一面 前田伯爵家
 一 出目源助常慶作 出目二左工門折紙附 同
 一 生成 一面 榮滿作 同
 一 黒色 福來作 一面 同
 一 翁 德若作 一面 同
 一 狸々 一面 同
 一 德若作 日本木家榮滿折紙附 同
 一 癡見惡尉 一面 同
 一 寶來作 日本木家榮滿折紙附 同
 一 子ノ面 一面 同
 一 辰右工門作 日本木家榮滿折紙附 同
 一 翁 寶來作 出目利滿究 德川(紀州)侯爵家
 一 小面 龍右工門作 一面 井伊伯爵家
 一 曲見 一面 同

三光	寶來作	一面	同
一般若	赤鶴作	一面	同
小飛出	増阿彌作	一面	同
石王尉	石翁兵衛作	一面	同
鷺鼻惡尉	赤鶴作	一面	同
惡尉癡見	文藏作	一面	同
曲見	出目常守作	一面	相馬子爵家
慈童	一面	同	
一般若	善真作	一面	同
瘦男	善真作	一面	同
邯鄲男	日光作	一面	同
翁	日光作	一面	池田鳥取侯爵家
黑色	福來作	一面	同
翁	日本作	一面	黒田侯爵家
橋姫	赤鶴作	一面	同
大惡尉	愛若作	一面	前田子爵家
小獅子	赤鶴作	一面	同
慈童	一面	同	
一般若	一方の角折れたるを後補ひしもの作不明	喜多六平太氏	饗庭篁村氏
小面	龍右工門作	一面	同
大黒	一面	同	淺野總一郎氏
孫次郎	出目常守作	一面	同
孫次郎	一面	同	同
小面	一面	同	同
惡尉癡見	一面	同	同
大喝食	一面	同	安達顯氏
三光	一面	同	同
小面	一面	同	同

小面	一面	同
連面	一面	同
平太	一面	同
狸々	一面	同
釣眼	一面	同
小喝食	一面	同
慈童	一面	同
大飛手	一面	同
泥眼	一面	同
眞角	一面	同
連面	一面	同
大癡見	一面	同
増女	一面	同
童子	神事 一面	同
童子	一面	同
呵似	一面	同
中將	一面	同
石王尉	一面	同
小飛手	一面	同
黒髭	一面	同
惡尉	一面	同
連面	一面	同
姥	一面	同
瘦男	一家	同
翁	傳 淡海公作 壹面	同
家康公拜領 春日作 壹面		寶生九郎氏

白玉	道木彌助	一筒	伊達伯爵家
鶴壽繪	古彌助	一筒	同
雲龍大鼓筒	箱入	一筒	松平高松伯爵家
芍薬の筒	常圓作	一筒	葛野春雄氏
丸盡の筒	首折居作	一筒	同
枯梗流シの筒	一筒	同	同
折居作			
大黒の筒	首折居作	一筒	同
小黒の筒	阿波作	一筒	同
鳳凰の筒	一筒	同	同

第四 小鼓

詩繪寫	初代彌助	一筒	伊達伯爵家
蝶に藤大豆詩繪	一筒	同	同
阿古			
大蕪詩繪	古折居	一筒	同
薄小鼓筒	箱入	一筒	松平(高松)伯爵家
幸小左工門正榮銘あり			

第五 笛

瓦落	准三后並近衛 信尹の記添	二管	伊達伯爵家
頭字空	一管	同	同
青葉	頭金龍	一管	同
高根	頭竹雀紋	一管	同
鬼一文字	頭薄雪	一管	同
裂石	一管	同	相馬子爵家
小男鹿能管	一管	同	江島伊兵衛氏

第六 太鼓

第七 扇

浮船仕舞扇	一本	金剛鈴之助氏
秋草仕舞扇	一本	同
扇	四本	寶生新氏

第八 箱

秘傳書藏置箱	桐製皮包符號 一個	觀世元規氏
觀世左吉重次の常用他見を防ぎしもの當時珍らしき工		
面箱	一個	藤堂伯爵家
面箱	二個	安達潤氏
面箱	一個	池田鳥取侯爵家

第九 雜

鈴	一個	二條公爵家
鈴	一個	銅駝坊陳列館
櫻町院御召下シ御紋御茵ノ鏡	一	野中完一氏
金剛鈴之助氏		

備考

本目錄ニハ六月二日(草稿締切)迄ニ
品名確定ノ通知アリタル分ヲ列記シ
タル次第ナレバ其以後ノ分ハ遺憾ナ
ガラ是處ニ編入スルヲ得ズ

の初編のりく紙尾に延永三十年一世壽
と後編のりく紙尾に延永三十二年一世壽
阿彌の墨蹟十数あるを以て(りく)と云ふ一
半ハ龍巻心得書なり符の施しある
深州教家阿彌を以てりく此の符を以て
乃の卷をりくと云ふも亦あるにあらざるの
有らん

親世元記出陳

伊達(政宗)方前(宗)と云ふ

其の年(宗)六代目親世(宗)左(宗)宗次(宗)死

勤(宗)方(宗)親(宗)先(宗)方(宗)宗(宗)書(宗)指(宗)り(宗)て(宗)自(宗)也(宗)

世(宗)に(宗)二十(宗)以後(宗)申(宗)樂(宗)活(宗)義(宗)

元(宗)記(宗)の(宗)支(宗)考(宗)

安(宗)田(宗)善(宗)し(宗)地(宗)花(宗) 十七(宗)冊(宗)

其(宗)の(宗)考(宗)考(宗)考(宗)世(宗)阿(宗)弥(宗)十(宗)二(宗)部(宗)集(宗)を(宗)分(宗)別(宗)し
こ(宗)の(宗)考(宗)考(宗)考(宗)飯(宗)阿(宗)成(宗)主(宗)の(宗)齋(宗)考(宗)考(宗)考(宗)考(宗)
是(宗)初(宗)考(宗)考(宗)考(宗)と(宗)考(宗)し(宗)こ(宗)の(宗)考(宗)考(宗)考(宗)考(宗)考(宗)考(宗)考(宗)考(宗)
あ(宗)の(宗)考(宗)考(宗)考(宗)考(宗)考(宗)考(宗)考(宗)考(宗)考(宗)考(宗)考(宗)考(宗)考(宗)

徳田校正本を好

かおる校直本を好 帝回圖書院

四家^あがゆわぬ校正本を好くとも校直本を

流布本の誤謬を校訂せしむる

りこん校直本の折こを好むを好むし

する断絶する校直本の縁千年

後の教(と)と直るい一事とさうする

よの也二三校閲漢を試みるは

まのりし大膽な直しするさうする

こんと直るさうするしむるゆわぬ校直本

刻さんなんが校直本の流布するさうする

うかふあまのりし本本のゆわぬさうする

る、保守の契 じふと得しとさうする

う

一 元和版 外月本 虎世善平の奥書

光悦ちりさゆくの美本也光悦本

ハ初を稀観るあささこんてりて

覆易さうする子前田家二百卷

揃あさうするに田山海の約あり終に

別冊をが場の陳列して下さるお日暮し
御不承り七十五冊とす

一 能子の居流士代 黒川真名出昌

このと里川真名の名宛とす
九冊のうらねまぐすのこまのうら

一 謡抄

謡抄中本と早稲田のうらねまぐすの
うらねまぐすの謡抄の果とす

数本各方面より出さるる本
本よりちんを赤し、各様を
附しあへる、うらねまぐすの謡抄
お色の尸皮家、流字をうらねまぐす
目録、輪廊とす、えん式の巻紙
をうらねまぐすの帝大田吉徳花
共傳りもあふ、こんとえん式を
体裁のえん式とす、うらねまぐすの
巻紙、うらねまぐすのうらねまぐす
このえん式、うらねまぐすのうらねまぐす

やゝ多しの外、大本の謡物より、帝
明神宗御紀より、作らるる本
一二出で、そのうち、三十四箇を
りて、謡言四集乙集と題し、
又、語り謡物と題せり、
此を、五巻本とて、版式古く、
謡物や、のり、自本と書く、思ふ
こと

一 謡本七十四冊

伊豆家藏

奥書、天正三年、橋本興兵衛尉祐友

天正四年、堀池次女忠清

内書、

一 日 表干冊 正四年、中紙

祝世皇霊御事

片桐石舟題

此二本之内、草紙より、七冊、
その

一 謡曲百巻

久松家

版を板子のつらみとて一書あり
其の首端は捺彩も精細の能書に添
へしなり此点に於て傳へる傳を名と
替りて本とす

一 喜多流祖元書像 喜多六平書

信濃の人の画像も此に改てん
かえん歴をそり書意の入りし是
公しとお録のキしと傳ふ

一 幸心流口傳書 幸國田書

一 亂筆田傳書 早稲田書

此の二書とも書きしと書きしとの
せし田の家元の記あり前書と
書きし奥書あり大也後書も天
文の奥書あり中打七印たきの
草の今の田師一助の祖也の撰と
小本也

一 宮曲抄

前田後出る

一冊 きのり子例 二行本

八九番と載せしむ

いんを信曲以前のころ即ち鐘を
代に打たせしむるは信ふ似し
いんを信曲に打たせしむるは
かあるとて種々命也 辭考
後ニ載せしむるは符のしはあは
此れを此のころのころのころ
まこととせしむるは

股をのびてしむるは
此れを此のころのころのころ
とせしむるは

能く装ふ。愛を交ねるは年 祝書(續)
節のふせ 義傳のころのころのころ
まをこし ち飲の蜀江錦 一身装の
来世の場中の聲をこし 祝書の
衣装を 喜まふ家より花をこし 祝書の
清くしむるは 祝書の家のをこし 祝書の

しらひとらてきしと西日田にきりて
 せ家のとあちところとてきとせおむ
 四坂本のきれとてきとせおむと
 せくしとせお伊とせ家津社家しと出る
 とせしとせ世のひたるめしとせしとせ
 しくとせ而とせしとと出海る数中とせ
 せしとせが後西港とせしとせはとせし
 十数とせしとせとせしとせしとせしと
 とせしとせしとせしとせしとせしと
 りとせしとせしとせしとせしとせしと
 のいせしとせしとせしとせしとせしと
 とせしとせしとせしとせしとせしと
 せのしとせしとせしとせしとせしと
 (後西港)しとせしとせしとせしと
 けしとせしとせしとせしとせしと
 十とせしとせしとせしとせしとせしと
 のんも根付大のしとせしとせしと
 とせしとせしとせしとせしとせしと
 とせしとせしとせしとせしとせしと
 のしとせしとせしとせしとせしと

能樂源流表彰會展覽會出品圖書に就て

理事博士 徳永重康

早稲田大學主催展覽會に際し諸家より陳列せられたる出品物中圖書に關し重に明治以前の木版圖書に就て左に略説を施む可し

第一、謠本

黒川春村橋本猿樂齋土代(今圓の出品)を見るに謠本出版物の尤古なるは天文頃の者なりと載せあれども春村自身も一見せず況んや今日にては到底其如何を確め難し今日尤古謠本と稱するは慶長出版の光悦本親世流百番を載せたる者にて一に角倉本とも嵯峨本とも稱す角倉が嵯峨にて刊行せし故其名あり安田善之助氏、檢常之助氏、帝國大學圖書館等の出品を見るに初摺後摺にて本の種類を異にせるを知れり次の同流謠本としては元和六年の卯月本ありて左近大夫春村の奥書を附す第三次の古本は寛永六年卯月の出版物にて或人は此を卯月本と稱すれども眞の卯月本とは元和版を稱す此以後續刊せられしは慶安二年版、明曆三年版、萬治二年版、正保版にて次に寛文に四種延寶に一種天和に一種あり斯く貴重なる古版の一堂に陳列せられしは眞に珍とす可し以上總て親世流の謠曲本にして其後同流本の出版せられしは眞亨、元禄、寛永、正徳、寶曆、明和、天明、寛政、文化、天保、嘉永、慶應を通じ三十七種を算す内唯本又は亂曲は六種を含む此内明和の謠本は親世流元章が既刊の文章を改正して梅の新作を加へ謠曲界に一改

革を企てし所謂明和の改正本と稱する者なり然るに上野圖書館出品明和改正本謠曲草案なる物の緒言に加藤千年の文あり

故重相田安源公諱嘗て謠曲謠本の謬誤多きを憂ひ給ひて侍臣岡部衛士眞淵に命じて悉く之を改竄せしめ給ひき衛士我曾祖枝直考に詢りて其話中を訂正し勉めて理順に詞雅ならしむ且新に梅枝一番を作て増加し通計二百有十番となし更らに定本とす茲に明和二年乙酉四月

觀世左近元章開羅して世に旋行す云々此に由れば明和の改正本は眞淵及枝直の二文學者の改正に由り觀世元章は曲譜等に力を費やせしが如し

觀世流外の各流の謠本は年號に由り秩序を追ひ陳列せられたる者なき故略之以上の版本以前の謠本として伊達伯の出品 天正三年の寫本七十四冊の謠本、慶長九年の卒部婆の謠本猶更りては觀世流原氏の出品世阿彌華阿古屋の松の謠あり片山九郎三郎氏出品天文廿三年觀世小次郎元頼筆まつやの松の謠等は珍とす可し殊に前田侯爵出品の足利中葉の連歌師廣徳の筆宴曲抄は曲譜を附し謠曲文の前身たる宴曲の如何なる者なるかを想像せしむるに最も貴重なる者也

以上の外豆本の謠本に觀世流の者寶生流の者あり小謠本には各流を通じ十數種出品されたりと未だ總てを網羅されたるに非ると明也笑謠滑稽謠本には元禄三年の五尺手拭、同看謠、寶永の亂曲扇拍子、享保の便用謠、脈の謠曲、風流時代記等出品せられたり

謠曲の番數には現今流布の者及び眞亨三年元禄

第三、能全體に關する圖書

寫本としては有名なる世阿彌十六部集の外黒川春村の猿樂考證土代、重修猿樂傳記等珍とす可し其他實錄抄墨覽拂ひ等の寫本を除き版本として能に關する圖書に猿樂傳記、栗田口猿樂記、猿樂沿革考、花傳抄、音曲玉淵集、古訓集、秦曲正名問言、秦曲問言上解、能之圖式、能之衣裳、唱曲辨疑、謠の秘書(當流謠秘傳抄と同一書)、謠曲指南抄、謠曲拾遺抄と繪畫本として謠曲圖會(謠曲圖誌と同一書)、能畫圖式あり外に能、形付仕舞付、版本には觀世流の能辨惑大全、能仕舞手引、舞樂大全、喜多流の七太夫仕舞附、寶生流能形付本、金春流(?)に童舞抄あり能の評をなせる者は版本として舞正語層と猿響あるのみ囃子付の古版本には八拍子(文化二年)謠屑書(天和三年)觀世當流離謠拾遺(享保六年)離謠鼓覺集(眞亨四年)觀世流太鼓秘傳書(眞亨四年)鼓笛集(元禄四年、舞樂集大全と同一書)、秦曲笛譜(安永五年)笛双附(安永六年)の諸書あり此を精査すれば今日の拍子の當りと大に差異あるを發見す可し

第四、狂言に關する圖書

世間流布の狂言記、正續拾遺の三部の書の外版本としては問の書として當流問仕舞附と「うたひあひの本」と題する小冊子の陳列ありしは珍とす可し此外狂言に關する版本は見るを得ざりし

第五、脇の謠書

二年同十一年版の番外三百番謠を加へ外に題目のみを擧げたる能の圖式翁卓其他より集編すれば約一千四百餘番に達す猶ほ今回檢査出品の舊謠いろは名寄を見れば今日迄知られたる題目以外の者非常に多し此に由れば猶數百番は既往の番數以外に加へらる可しと信す

第二、謠曲註解本及批評本

謠曲の文章を批評せる版本は奈良土產(眞亨四年)及返答の二部あるのみ、さきの評と題する小冊子の版本は亦奈良土產と同一物也謠曲註解の尤古の版本は謠抄なり年月日作者に記載なきし文章を然讀するに「内に文祿四年迄は何年」云々と記載せる所ある故文祿年間(書なるを推察され得註解も亦自己の説のみを擧げしに非ずして諸家の説を集録せし觀あり河島伊兵衛氏及帝國圖書館其他の所藏謠註甲集と題せる書は此謠抄と同一物なり猶謠註甲集に二種の版本あるを和れり謠曲百番を註解せる者也謠用抄と題する書は寛文元年の出版加藤齋の著とす十五番を註解せる者にて謠抄と同一文章に只註解を附加せしに過ぎず此に續て謠曲拾遺抄あり明和九年の初版にて一番を註解す此に二種の版本あり此外謠語須知なる小冊子の出版物と山姥風抄、高砂増々抄の二番の註解本あるのみにて其他に知られたるなし獨り昔し法音抄なる正歴四年の版本ありて廿二番の註解本ありし由なれども遂に今回の出品中にも見當るとを得ざりし

進修流の版本の外は既く各流寫本なりし如し以上略述せし處は總て版本にして明治以前の者に限りし也

終りに願ひて二動進能及古代の能組に就き陳列せられたる寫本に由り略述すれば古代の能組として細川三齋公の直筆番組、豊公時代能留置、の外明歴より寛文に至る年間の能組、文祿二年の禁中能組、元禄年間の御奥木丸に於ける能組嘉永三年内裡に於ける能組陳列せられ其他動進能に關する圖書も少からず出品せられたり此に由れば一世一代動進能俗に御免動進能として舉行せられたるは慶長十二年觀世金春、元和七年觀世重成、明曆二年觀世重清、眞亨四年寶生、寛延三年文化十三年天保二年に觀世、最後に嘉永の寶生動進能を催せしに過ぎず然るに普通の動進能(町年寄へ届出づるのみ)としては正徳より嘉永迄六十四回催されしとだけは集録にて知り得たる故實際は猶此より多數なりしなる可し

碧雲莊

購宅喜山隈
幽家適吾意
解衣時盤桓
公退閒三事
宗山一茶寮
諸公所嘗置

水清芳轉嫩修葺漸已備
晨漱一漚泉花影淋至戲
夕步漫一塢徑雙松起清吹
聽泉忘心機倚松北坐睡
本名多珍奇遠存故人寄

樹深藏海塢暑夕嵐氣暎
偶上西車檣恍作涑濮思
蕭然小茅庵庵門題何一字
千里瓊中湖昔居大皖地
品水靜點茶禮法傳大義

可以参真禪 可以厚友誼
重客談笑中 道叟存正味
正氣拜君恩 甘露天攸賜

庚戌年書

琉洲主人

松原井徳

○移居おしゆの舟を以ての大家さう 流るる原宿にお
ふ集りおんを思ふとせし行く北人共其れ出舟
を不味流の茶湯と傳ふ 庭を中一茶湯
あるも不味の作り、ふるふるも心づかぬあつし
を思ふ 移しぬるさうと云ふ 茶湯を明々
唐と云ふ不味の合する所、入つて又もんわ
る茶湯が好く又んしちるも其るもなとて成し
しう、三人世民園中一の橋を傳し物名
を附し思ふ西東橋思ふ一滙ある思ふ漫々
途思ふ花海鳩而して社を環雲を社と云

あ、こゝろの、疑ふ、事ある、右の、好、ま、
の、こゝろ、の、人、の、身、も、也

○近、辨、宗、平、四、年、の、刻、字、の、任、百、物、の、一、と、平
あ、こゝろ、の、難、心、と、鑑、定、を、と、り、よ、と、り、の、心、の、
ハ、疑、ふ、心、も、刻、ま、け、母、の、心、也、同、の、辨
定、と、是、の、代、の、あ、こゝろ、と、物、の、一、と、平、
口、の、痕、跡、も、是、の、心、の、特、徴、也、刻、字、も、
か、こ、漢、文、入、り、の、り、と、是、の、心、の、あ、こゝろ、
と、入、り、の、り、又、又、音、も、あ、こゝろ、の、心、の、
と、平、と、は、義、家、の、代、の、心、の、

以、と、考、へ、る、事、も、あ、こゝろ、の、心、の、
と、山、三、十、五、世、の、心、の、は、後、母、の、心、也、又、
あ、こゝろ、の、心、の、あ、こゝろ、の、心、の、
代、と、共、に、あ、こゝろ、の、心、の、
後、母、と、鑑、定、を、と、り、よ、と、り、の、心、
を、考、へ、る、事、も、あ、こゝろ、の、心、の、
と、辨、宗、の、心、の、あ、こゝろ、の、心、の、
也、辨、宗、の、心、の、あ、こゝろ、の、心、の、
と、心、の、心、と、一、但、し、心、の、心、と、
り、る、心、の、心、と、一、は、心、の、心、

7 既ニ其甚と補ひて又改るる可と句を句
 多々留の代々のボクへ一と長を長
 多々しと其後のいふまに多くの日謝を拂
 つて一にむ大なるを謝する人合家の
 出来てくまも也其のよこに深川の家の
 とせよといふも木その家の代におもひ
 らんも今木自りの一掃のいふといふの
 まるる其のいふ此のいふけを修るる
 其のいふてさるることさるる七にん
 留りのいふてさるることさるる十の
 八九をいふ物と句
 ろくさるるいふまに拂へはるる
 とまへり、自らさるる品をさるる
 留りのいふてさるる代のいふ
 とまへり、自らさるる品をさるる

哭大岡廉平詩

大岡廉平は東淺井郡大柳村大栗、栗齋又箕洲と號す、天下

の奇士あり、風に慷慨、大志あり、顧山陽、秦嶺浪に學び、後

昌平齋に入りて佐藤一齋に學ぶ、最も遠遊を好み、足跡海内

に遍し、肥前大村侯大祿を以て招きたるも固辭して就かば

晩年佐渡に航し、颶風に遇ひ覆没す、時に年三十八、湖山初

め廉平の賈兄大岡松室に就て學ぶ、隨て廉平とは師友の

交わり、其死を聞くと詩を以て之を弔す、是れ今より五

十餘年前の事あり、記者は前年來大岡廉平遺稿出版の志を

り、昨年願詩を湖山翁に請ひたる時寄贈されしもの、此に

掲ぐる舊作の哭詩也。

西荒踏盡又東陬

綵把生涯付漫遊

絕海風濤八千里

飛鴻身跡一孤舟

壯年豪氣多招禍

幾度青衫挽不留

果然斯人以之死

不知埋骨是何洲

西荒踏盡又東加

綵把生涯付漫遊

絕海風濤八千

里飛鴻身跡一

孤舟壯年豪氣

多招禍幾度青

衫挽不留果然

斯人以之死不

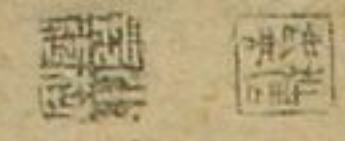
知埋骨是何洲

右軍大岡笠沙君

舊作以治是兩

種和之

九十七卷東洲山翁



一結陡峭現
身說法

引
欲言而不言。物或沮之。不欲言而言。物或誘之。言而有所言。其人籟乎。吾不得而知之。言而無所言。其天籟乎。吾不得而知之。人籟而白乎。天籟而玄乎。吾不得而知之。詹々小言掩耳而聽。則天人一籟。閉眼而觀。則玄白一色。躍如其中者我也。

玄白誕言

破天荒齋松平康國著

天圓而日月星辰皆圓。地圓而飛潛動植皆圓。物之方者出于剗斷刻畫。人之所為也。人則頂圓趾圓。身圓腰圓耳目圓鼻孔圓。方者惟齒然而行貴方正。節貴廉隅。乃知圓者天之道。方者人之道也。故天道無所不行。而人道有所不通。惟水能隨方圓之器。其在天人之間乎。宜矣。柱下叟一則水。二則水。

石碑不若口碑。墨畫不若心畫。

玄白誕言

天圓地地方論
記載天子戴
辯矣天圓者
方蓋屬作人
獨矣屬作人
骨之妙亦推
警策

水哉々々我
仲尼亦取于
水也

漸近自然

陸象山必首肯乎地下矣

君子不由也

性與天道。孔門高足。尚不可得而聞。而今日乳臭書生。亦喜讀哲學之書。宇宙性命。論驚高遠。動輒病風喪心。或至殺身。學之躐等。其害甚於毒藥猛獸。乾道微而婦有爭氣。恒產廢而士有賈心。我善熟六經。然後六經註我。不然六經將拒我。何註之有。

西歐文明生于動。東亞文明成于靜。靜之極。槁木死灰。動之極。飛禽走獸。其去人也遠矣。

賣物者得直。賣恩者得怨。賣節者得辱。清國之病一偽字。歐人之病一私字。

鸚鵡猩猩能言。而不離乎動物。不遠者亦鮮矣。

祿教字面奇關寸鐵殺人

吾輩頂針

人自尊而尊。自卑而卑。古人教人以其所以異于禽獸。而人與禽獸有別矣。今併人與禽獸。謂之動物。而人以動物自處。鼠竊虎噬。雀穿鳶嚇。固其所也。獼猴之為人邪。人之為獼猴也。達爾賓可起。吾請問之。

古有祿仕。今有祿教。

太上貸德。其次貸智。其次貸財。

取數千年有數之人。律同世一時無數之人。曰古今人不相及。此輩縱遇古人。亦以為今人而已。眼有明暗。人無古今。

予貴而不富

前言克己後
言忠恕孔門
傳授心法不
外于此

貴莫貴於無病。富無富於無債。

漢土聖賢所說道德皆為士大夫以上發。大學一書

純乎天子之學。然天子亦人也。故復可旁及。唯其

旁及非直達。是以蚩々之民四萬々矣。

中菁之事。人獸所同。羞與不羞。人獸所異。西人之握

手接吻。禽獸之漸也。而身不袒裼。言忌猥褻。是則

遠于淫矣。嗟呼。紫髯綠眼。彼何人乎。

內多慾。而外施仁義。漢武尚為可取。後之儒者。則內

多慾。而外言仁義。

以理制情。以情行理。

故彼三藩子
孫亦已微矣

儒興道裂古
人言之以儒
僧為求道之
天竺歸自我
始破

三河武士之興也。僕隸廁養。皆有封侯之相。江戶幕

府之亡也。勳舊名貴。亦皆有乞丐之相。

釋氏欲凡夫之為菩薩也。非欲為僧。孔子欲凡民之

為君子也。非欲為儒。僧與儒求道之筌蹄也。膾炙

熊掌則不在此。

不欺自他天人。而惡始可防。不愛心力財物。而善始

可為。

武田機山廢論語而不讀。是能讀論語者矣。今ホッ

ケツト論語出。而論語大售。吾病乎。讀論語者之

多。

有此景無此人

子白語言

柳暗花明。水重山複。此間着一放翁。始畫矣。

或謂漢土之詩。長者不過數千言。短者則二十言已。

局面狹小。無變化之地。且古人所言。今人不能復。

加。不久而必廢矣。盍視于人面。人面尺咫。所具止。

耳目。鼻口。而世界十數億生靈。一無同者。苟師造。

化一字。可以千億萬變。一句可以包羅宇宙。惟無。

其人耳。

男子剛中有柔處。婦人柔中有剛處。以柔中之剛。乘。

剛中之柔。是以英雄亦往々畏內。

儒如水。道如湯。釋如茶。耶如酒。

箇中真味解者幾人

奇論正理

君子小人以位言。而有治養相須之美。君子小人以

德言。而有正邪相爭之弊。

人身負陰抱陽。眼在面。而趾前向。頭可左右顧。不可。

後顧。背倚則仆。却步則踣。天之於人。與其進也。不。

與其退也。

漢高之鴻溝。設窞也。劉備之巴蜀。射宿也。

被蝸螫者。殺而塗其液。立愈。小人之毒。須藉小人除。

之。然不謹其後。則逐狼而揖虎。

過笑失容。過哀失明。過怒失身。過忍失骨。

莫夜之時。一燈可以代太陽。澆季之世。小賢可以代。

乞白延言

天地不仁亦
可以見

論外弱內弱
歸咎于堯舜
周公可以破
腐儒之膽

大賢

吉。一。而。凶。悔。吝。三。生。一。而。病。老。死。三。其。理。妙。哉。

有。殺。身。而。成。仁。者。有。身。死。而。成。名。者。

唐虞困于三苗。周困于犬戎。秦有胡。漢有匈奴。其後
契丹鮮卑突厥吐蕃。無世不猾夏。遼金蒙滿。禍之
尤甚者。小則金幣。中則割地。大則舉國左衽。蓋外
弱始于堯舜。內弱始于周公。聖人且然。况其他乎。
秦皇漢武。真英雄哉。

以我之長較人之短。古君子尚可誨。以人之長較我
短。今小人亦可師。

名言至論

正續皇清經
解安獲秦皇
之一炬而燼滅

可。取。而。不。取。則。將。至。乎。取。不。可。取。者。不。可。與。而。與。則。
將。至。乎。不。與。可。與。者。

孔子之道。譬如樹也。而馬鄭見其枝柯。程朱見其脈
理。陸王見其生意。如清儒則數落葉之類耳。

孟子民為貴。誅匹夫紂。竝土芥寇讎等語。不合乎國
體。見斥於王朝。而其貴王賤霸說。則吉田松陰之
徒。藉以唱勤王大義。物之利害。豈可以一端言。
武道廢而俠客出焉。儒教弊而心學作焉。德川氏之
衰。其在中葉乎。

鉛。不。可。以。為。鐵。鐵。不。可。以。為。金。而。泰。西。道。德。責。人。以。

如讀文中子

眼前之事人
未道破

小人之使為
國家舊害並
至

近取譬亦可
以見仁者憂
世之功

金不問其質其弊也鉛鎔鐵鑄何啻不成金
菓有蝕剔而食其餘人有疵舍而用其餘
均是賢哲之像也塑而祀諸廟中則人拜之鑄而建
諸路旁則人指之
甘為委吏乘田聖人之量也耻折腰五斗米高士之
操也

政治詢乎商賈國是聽乎外人是謂小人為國
儒挾孔子浮屠挾世尊一也寧若挾天子以令諸侯
地有引力是以鳥雖飛而不能止于空石雖轉而不
能離地然今以物擲空則舉矣是人勝天也唯其

舉逾高其墜逾速是謂天道好還孫悟空乘筋斗
雲能行十萬八千里而仍在彌陀掌上老子云天
網恢恢疎而不失彼在天網中跳梁跋扈者雖或
有一指一髮之穿目而出豈終免乎

一二為四二三為六而四云六云名也故謂一二為
六二三為四亦可不知一二為四二三為六者愚
人也爭二為六二三為四者智者也爭與不爭
有間乎不爭與不知有間乎一去一而零無零則
無一乎有一然後有零乎此零彼零加而算則二
矣然零與一自別烏得有二非二則零乎一零二

如讀公孫龍
堅白論

元氣消喪而
能振者吾未
之聞也

貨悖而入者
亦悖而出

幕末志士唱
王政復古而
作明治新政
亦非其所豫
期

支白話言

零。何以別焉。同異之辯如此。愚者之所惑。智者之
所乘。而智者亦有同異。吾與誰同異。

佛人謂英國之俗。譬如壘中麥酒。上泡下滓。適口者
惟其中。誠哉此言。我邦元氣亦在中流之士。而四
十年來。浮而為泡。沈而為滓。存者無幾。吾為國家
嘆之。

華族之財。入而不出。猶撲滿也。然吾恐後世或有毀
撲滿而分財者。或有併撲滿而奪之者。

中世之末。閣龍探舊世界。而得新世界。伊太利學士
興古學。而發新學之端。是皆非其所豫期。然而温

林子平渡邊
華山等所以
獲罪於當時
也

雖民權論者
所不敢言作
者乃概乎言
之何乎二字
秋霜烈日

故知新之妙存焉。

登富岳絕巔。三更觀日出。乃呼曰。天明矣。盍起。下界
曹騰。聞以為妄。是故獨見之事。易驚視聽。先知之
明。易速疑惑。

專制之世。君主有雷霆之威。而直言極諫。不乏其人。
今也立憲。務開言路。而言涉君德。惴乎如觸大辟。
何乎。蓋格君心之道。莫嚴於專制。保君位之道。莫
備於立憲。

善讀者。眼中無字。紙背有書。

西洋之於先哲。念其生日而慶之。東洋之於先哲。

支白話言

記其亡日而祭之。彼喜其出世。此惜其去世。一考一彰。一順一逆。東西人情之異。亦見于此。

一齒疼而渾身癢。一民怨而舉國殆。

孟子之文巍峩如山。而乏雲烟之致。莊子之文汪洋

如海。而少魚鹽之利。

大槩言之耳

醉中無僞言。醒者有機心。

仁者見之謂

古云膏以明自焚。謂因智取禍也。余云膏自焚以明。謂捐己益人也。

男女思慕。骨肉親愛。兩者之情。一見相類。而其實相反。故其一相觸也。如坎離之鬪。如風雷之激。男女

情勝。則父兮母兮。劬勞不已。骨肉情勝。則之子彼姝。失戀以死。以風教任者。寧可不思哉。

似矯而真。蘇張復起不可誣也。

夫婦有別者。西洋為然。非分財乎。夫婦無別者。支那為然。非多內乎。

今之從政者。儉乎奢乎。吝乎貪乎。

量入而制出之謂儉。出踰其入之謂奢。入而不出之謂吝。因出求入之謂貪。

欲務善。必先去惡。譬猶易田者。鋤莠驅蝗。是儒教所以多禁止之語也。然不溉不糞。苗何以長。故道德莫大於弘。德莫大於養。以去私慾為道德者。則治噎而不食之人耳。

生氣尚旺妄
用斧鋸使人
無陰處而息
焉何其不仁
也

文白話言
囊欲廢漢字者。今病其子之不識漢字。嗚呼。厲之人
哉。

秦皇所焚。先王大典。所不焚者。醫藥卜筮種樹之書。
而蝌斗遺經。藏乎孔氏之壁。蓄乎伏生之腹。傳以
至今。而醫藥卜筮種樹之書。則多不傳焉。清祖禁
漢文用滿文。而今日清人能解滿字者。十無一二。
蓋優者存而劣者亡。天理非人力也。漢字可存而
存。可亡而亡。彼如之何。豫章參天之樹。生氣未竭。
今方其未枯。誤用斧鋸。吾唯見及之毀齒之缺耳。
迂腐如此。亦呂政之所坑也。

世說中語

今何其紀僧
之多也

畫虎不成反
類于狗

某遊清國。一儒生問曰。敝國有二十四孝。貴國亦有
諸。某曰。敝邦則有二十四不孝。儒生大慙。孔門四
科。言語居一宜矣。

紀僧某。方外之雄也。行脚獨逸。圓頂。黑衣。錫曳地。夏
然。彼都人士。以為東方高衲也。讓路目送。既而蓄
髮與髻。絹其帽。絨其服。口煙手筇。英步而佛趨。即
為尋常行路之人矣。

陽明之學。單刀直入。聖門捷徑也。然絕壁斷港。渠自
作一條路。踰險如飛。蓋躋勝有具。趨捷乃爾。後之
鈍根人。遲重如牛。而欲由王子之途。不中道而廢。

雄壯絕倫

則顛為溝壑之鬼。多見其不知量也。
立馬喜馬拉之上頭。擊楫密士比之中流。後世豈有
其人乎。

譽以口者。其出也輕。譏以腹者。其宿也深。

處今之世。髮欲黑。面欲白。顏欲厚。唇欲薄。鼻欲高。頭
欲低。皮欲硬。骨欲軟。肉欲溫。血欲冷。名欲趨。責欲
逃。長欲誇。短欲護。剛欲吐。柔欲茹。怨欲記。恩欲忘。
功欲專。罪欲分。與欲少。受欲多。外欲豐。內欲約。巧
欲銜。拙欲藏。交欲汎。容欲狹。器欲舊。人欲新。

成人在學。用學在人。

讀了余則欲
笑
要言不煩

勇者不懼
智者不惑
仁者不憂

十字行。一字立。大字臥。亦可以為大丈夫矣。

僅々數千言耳。宇宙天人之際。正觀反觀。豎觀
橫觀。大觀小觀。淺觀深觀。高觀卑觀。靜觀激觀。
樂觀悲觀。無物不觀。無觀不具。真能尺幅中收
天地江山者。

藻洲牧野謙拜讀

大英客中獲之

白飯印

六朝ハハ御也

云々の款

鈍丁 丁散身

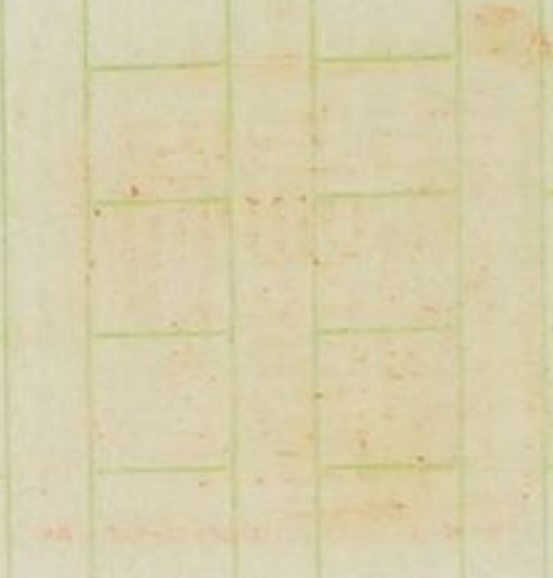
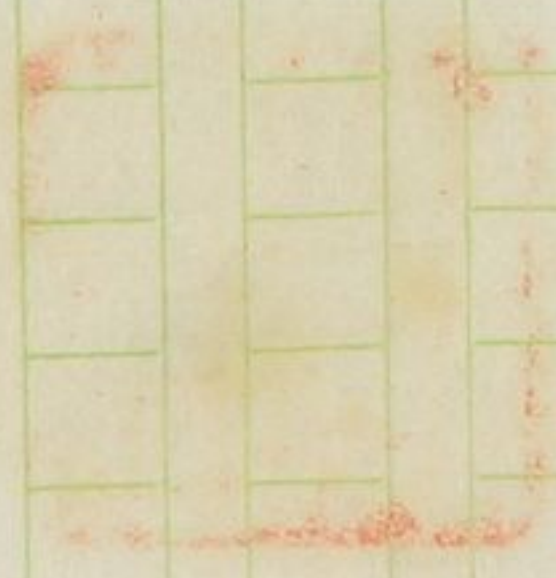
のり

一文云君テ之風

一ツありぬは不足

鈍丁の千曉





字余曰甘園庵

庵の字

カークと記
あふふ 似たり

壽山石

吳循南

○大坂の穢多打と西渡とよふふある南
のゆいふとくくむもりやあゝ特殊即ち
そのとほふ、おまゝこころ女の土地の成地
を甚しくいゝまゝのゆかゝり轉り
と現る此の以山科の村あり、特殊即ち
そのとていふい村民の激想を根き終
然境の拙死を遂げい候、まゝとらり穢多
とを擧げしきむふ、此の部は内々
二三大寺湯もあつとまゝふれ、太鼓
と評をせんは居る、このいゝまゝの

然を家び、大坂の口つすゆまゝあり内々
と修成ししをを修りしは、このもゆを
ふ、此の家を全國の獣皮のお飾を立
る家えいゝまゝとまゝのいゝ
○大坂のと擧二丁目と高方とまゝの井屋士
現るあゝいゝまゝとまゝのいゝまゝと
上皇断の難もいゝまゝのいゝまゝのいゝ
此をを修成し、まゝのいゝまゝのいゝ
いゝまゝのいゝまゝのいゝまゝのいゝ
一程の擧げしと云ふいゝまゝのいゝまゝ

心あるものたるは、
り、移るゆゑに、大政の家、
果するもの、
入る、また、
二代の、
花と、
元の、
事、
元と、
つづ、

聖井、
ち、
ま、
味、
道、
人、
政、
人、
ま、
も、

し居らむと筆を置きて其の言のことししと
人又思ふ土花の棟木は一紙を紙し置
を思ふと云ふは御心もいと御心正則の
花は田ひと云はて遠く并用終る天
五存心：野うらむと云ふ又云人せ
為の欄まを括しと云ふらんも御心正則
の遺物を後ふ土花の棟木の来歴の
ありんか或るおん二枚のランま
の透しぬりも波深きし波のふん
まうく凡そまをさしおぬる花の心

内まへと一殿うぬらと云ふに心を今
まへまへと云ふと云ふの奥に二層と云
花の石十枚は花の枝也根えきの
二枚の跡をと御心の白くも云
中の全庫しと云ふは枝と云ふ又茶
花の床の赤うしの花の心二方
穴あらしはも御心しえん土花の
葉二千五百枚をいすとき 輪轆を
花をましと云はて花と云ふ即ち繩を
通しと云ふと云ふは御心也と云ふ

一見子寺の庖厨と見え、ことごとく思ひ
ちこ流るゝ大就換也

○この御所四所府支那の政略を志す中、
この御所の全刻は、新日内、お洲南方、
於て其の言を、とて親く、羅振玉の支那、
言し、この言を、
許合部、言也、余之んを、
了得く、事功の、
り余も、
定定を、

流るゝ柳公権の面目を、
墨紙に、
長慶四年四月六日翰林

と、
我法和元皇天長初年、
長安四年四月六日翰林
侍書

公士朝議印行右神湖上輕車
都尉賜緋魚袋柳公権為右街
僧録準公書

強演邵建和刻

本文各行十一文字者此格也

昭和十一年六月廿号

大坂途中 十ヶ所決

○左の記すは大阪新橋の載りしは只氣
しるしは(一)の
記すは只氣しるしは只氣の
記すは只氣しるしは只氣の
記すは只氣しるしは只氣の
記すは只氣しるしは只氣の

高山植物屋

名古屋の崎人

名古屋は中區榮町、近頃新築せられた伊藤呉服店の壯麗な建物の前で、米屋の屋敷見世と相並んで、僅かばかりの草花も花とも附かぬクジャクシダ、アサヒランと云つた如な山岳低地の本草を鉢植にして大地に列べながら、恣う髪を長く後に垂るほごにして、垢染た顔に粗末な衣物を纏ひ、物珍らしさうに寄來る人を前に、頻に本草の説明をして奇怪な草花を賣つて居る五十ばかりのお爺さんがある、名は石川徳治郎と云つて元は尾張藩の士族、本草學者の泰斗故伊藤圭介翁を先輩に頂き、其頃尾張本草家の團結として知られた尾張菅百社十人組の一人親譲りの家屋敷もあつて相當に暮したものだ、持て生れた数奇な根性に身代も憂なしにして今のやうな零落もどんどんに介せず東區新榮町九丁目の見ると汚せき九尺二

間の詫住居

赤貧洗ふが如しといふ身の上になつても、相變らず無慾でそして長閑な生活をつづけてゐる、榮町の夜店などでも此所は夜でなければ見世を張るを許されぬから、お爺さんの商賣に出るのは夜に限つてゐる、其處でも恁んな長閑な事を云つて居る。俺の人は人が十本掘る所五本位にして十分念が入て掘である、俺は儲なんか眼中に置いて居ない、培くものは培くといふ。マア好きななり持て行て植てみるが善い。錢なんか如何でも善い。

翁の家へ行つても別に花屋などといつた如な大仕掛の養成場がある譯ではない、たゞ四五のお粗末な植木鉢が列べてあるばかりだ。此れでも高山植物屋ですか。」「と笑ひながらいふお爺も何々を笑つて。俺の花壇は俺の腹にありますわい。俺は本草の事なら今の博士より克く知つてゐる。

何所の山の何邊に如何云ふ草があるといふことまで確知して居る。それが偽なら何科のどういふ草が欲しいと注文して見なさい私は直ぐに其草を持つて來てあげ

る。」「と豪い氣焔だ。翁が此業を始めたのは日露戦争頃だが、今は相當の得意もつき旅からも標本の注文がある。近く持病の胃を病んで二三日店を張らず、お得意の西區長者町村瀬醫師に治療を受けて居るが其報酬は矢張草ださうな。今年には飛驒の乗鞍嶽へ行きたいと云つて居る。植物は極めて安いもので一本最高五十錢位以下十錢位まである。ホテイランなんぞ云ふ正眞の高山植物なら一本五六圓するさうだ。翁は純粋の高山植物屋だが平地の物でも珍らしい植物は大抵扱かつて居る。(名古屋通信)

○大段の書家よ、子振にまゝに帯集して終りに
終つてゐる田中徳精、尚料の文筆業をも片
んとすまら、余の寄附ある所、うけあはし
お返しと、田中一助の家を返つして御
心へ集るると、寄附あるの同成書は、
あきあきと物をす、引つて片々も、大い
り、書寄附あると、余のまゝに、その元集
早稲田の株とて、まゝに、梅の(十五、十六)ん
早く、和のとて、まゝに、（い）の
あり、このまゝに、世に、

○余の活版部、活字、熱心、帯集る、
うけあはし、~~物~~、（い）、校め、
、甲乙丙の、あつる、（い）、
且つ、熱心、（い）、
ろ、（い）、
松と、（い）、
印、（い）、
い、（い）、
り、（い）、
炭、（い）、

甲乙兩國の軍備の差を論ずる所
る所以と云ふと、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 大抵のことと云ふは、

る人を動かし、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 則ち其の縁を閉

係を新議せしむるに、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 然らば、

庶大なる莫大集款を得るべし、

○東部の揚反号村一ちり、

先動の(John Munstated London News)

一千八百六十七年七月と十二月、

と申す、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 二冊

の初め、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 大抵、

の軍の、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 則ち、

は、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 然らば、

民部、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 則ち、

の、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 然らば、

一、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 然らば、

序、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 然らば、

の、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 然らば、

其、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 然らば、

これ、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 然らば、

也、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 然らば、

の、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 然らば、

の、甲乙兩國の軍備の差を論ずる所 然らば、

のを純然とリ式する 尚軍のちの故日下
 一ツ橋とちいふきをストウ橋と書きしるま
 借記多き 尚軍の弟徳川氏部卿のちの故日
 リ又ホルツマウス 橋も其の甲船を給ふ
 の國ちと 印船の氏部卿陣主橋お風の
 松葉のしゆせん 船橋を給んとしる一武乃
 腕指ををぬす ちを回す、その日とさうこと
 四十年前の事、いんちてや、尸史のぬ資料
 とさなり、附地北のゆ甲と、そのましとさく
 匠さう、氏部卿の訪書、まとの鑑取のちの
 伴(き)

○多岐のちの故日下 指紋をうつる 犯人の
 ちのちの代わりの 記しを載す 各人の指紋
 同し、いふこと、その 氏部卿の 橋を 押印を
 一ツ橋とさう、まても ぬす、その 下の 雨傘を
 一ツ橋とさう、外人の、之れを、あつて、入るの 指紋
 とさう、まの、いふ、ひの、さう、まの、まの、まの、
 異さう、まの、まの、自れ、的、指、做、と、し、七、橋、入、り、指、の、と
 七さの、まの、まの、まの、まの、まの、まの、まの、まの、

には、善、亮、や、し、つ、月、林、る、侍、の、雨、降、り、定、事、を、

指紋と犯罪者

此の程如君の通信に日英博覽會に犯罪者の指紋が出品されてあることを記してあつた、一體指紋法とは何様ものかといふと人間の手の指頭にある俗に渦巻きとか流れとかいふあの紋に據つて犯罪者の何者かを調べる方法では英國のサーウヰリヤム、ヘルシヤムといふ人が學術的に研究しフランス、ガルボンといふお醫者さんによつて創りて實際に應用された、その説によると人間の指の紋の種類は極く少數であるが五本の指の紋の配置が二人と同じ様に揃つた者がなく縦合紋が揃つても其の紋を現す線の數が異つて居る、だからその紋と其の數とを數へて見ると直ぐ何者であるか分かるといふので、日本では平民刑局長が英國で研究して歸り今は各監獄で着々應用してゐる、少くも専門的に説明すると指紋の種類は渦狀紋弓狀紋蹄狀紋の三種に大別し更

に渦狀紋には上流中流下流の三種、蹄狀紋には甲乙二種に細別してある、而してそれは一々價を附け渦狀紋の上流が七點蹄狀紋の甲種が二點といふ風にしてある監獄には指紋を捺すべき一枚の用紙が設けてあつて入獄者があるとき指、中指、環指、小指、拇指といふ順に左右の五指にインキを附けてその紙に一つ宛捺させ更にその下方に參考的に片手づつ捺させまた裏面の索引の所には左手の示指だけを捺させる、この指紋の下には紋に従つて一價を附け別に分類番號とした所に上記の指順で一七五三といふやうに記入する、但しそれを合算することをせずその儘の位取にして一萬七千五百三十二號と呼ぶ、即ち一萬は示指に弓狀紋があり次の七即ち中指に渦狀紋のある男といふことが分る、且この指紋紙には指紋と同時に本人の姓名年齢特徴は勿論犯罪の種類等總てが記入してあり、この同じ票が入監毎に三枚出來一枚はその監獄に残し他は司法省へ送り同省で位別けにした一種の字引が出来る、即ち疑はしい犯人が入監すると直ぐその指紋紙を送り本省は右

の字引を繰つて調べると再犯者ならば直に露顯する、大阪の堀川監獄では昨年の四月から九月までに七萬の入監者の指紋を取り今日では既に十三萬に達してゐる、未だ眞の着手したばかりであるがそれでも試験的に各地から本省に照會したうちで四名まで前科者を發見したといふ、田村典獄の談によると英國ではこの指紋法を犯人捜査に應用してゐる、それは兇行現場の窓の硝子とかコツプとか犯人が手にしたらしい器に或藥をかけると思つた指の紋が現れる、それを手係りに犯人を採偵するのだといふ日本でも目下某藥學者の手に藥の研究中である程行ふた第一回の試験に可成りの成績を収め得たから遠からず完全な藥が發明され尙上記の指紋法もやがて司法省から警視廳の手に移り警察に於ける取調中に犯人の化の皮を引剥ぐやうになるのであらうとのことだ

○大坂朝のついでに上野池一とく七書畫を
あつた其の通りくコロメイが版入改しを
悦光珠の面を(寄能々)其の如く
とてゝも無延二人の面が、とて
書者いれをとりきつてのまゝ
向のく九のひし行く、出し示え
二十数点多くを稀世の珍をも
き眼福を得る、ちよりのものを
せん

畫圖漢文

一卷

宋本

卷之二 畫圓滄文とあるは 卷之

三

一項を十項をもつて懸懐の

を云ふは十項以下に接續す

るは十二三行あるは此の間

に闕文ありと思ふ

書と正楷の字が中聖武位

未比字體とあるは前の味

り

中聖武と對比するは滄文ふつ

りといふ事なりと 廣きなりと

完し

滿紙さへけしうし、灘の高家

加納治右衛門とあるは 禮不為不

花の畫圓滄文とあるは

く、元々の節とあるは一卷

畫圓滄文

佛書中とあるは

未比あるは或る早く支那

逸しひるしき、もむらふ
此一巻、研考の傍りたるもの也
昔しき又今、遺書の中、あつてこそ
こそ長ししものこそん

一 定家自筆中歌集

このふふ本、あつては、代わりの
と、禰志、紙のき、定家の手抄
本と見えし、月花の、関下、
と、紙、と、り

書と、海、海、うし、せ、う、海、有、る、所
滑、り、た、り、お、も、の、こ、も、の、日、の、み、み、ま
た、の、藤、の、は、い、と、い、に、い、う、が
研、考、の、こ、も、の、見、え、け、り
半、紙、の、歌

た、こ、ら、さ、こ、つ、ま、さ、の、い、は、い、ひ
さ、い、ひ、ち、か、あ、り、の、し、ん、し
の、し、ん、し、の、し、ん、し

・四條大納言廿六人撰

高鎮革

後部は京極らに託すべし

高鎮の書面より似て高放書

○のまじりし

・伊勢物語 第一冊

冷泉天皇の御成敗

三條西内府の文略に補す

上巻尾

清本

文暦二年五月廿九日以入道中納言

自筆を古字授

とあり

・自貴行 一卷定加志

無界紙 字形中堅武位

古本と橋邊氏の書と云ふ

社司の書と云ふは行の字に於て

しらく書も見たりと雨もくき
と

此の尾、朱印を捺す、善光の二字
抱糊と見るや、尚も玉花の字
七回横の印ありと云く、何人の印
善光の「祐徳寺」（龍の字）
善光に

一 乾元 一 崇

一 阿比華陀 一 崇

白麻紙： 金の輪廓ありし

書一見鎌倉代のものと思へ

丁字の洲点つけあり

此の尾、長文の跋あり

壽永二年僧運其、祈乾のあ

納りて子跋文一讀あり其と云

ふ

先年向島洲南北の跋文と云

真しと云く、宛り、今花七、早稲

田の文意あり花

江の軸身は細字ありと干支

誘うあり此く後世の好むをん
歎

径の草をき僧珠のうらとあらし

一 佛像 待画

幅三寸二分許
一枚一寸九分許

金瑠璃挿細毛を用いて書きし

秀衡の草と待画

幅三寸二分許の挿毛し

位老家の草花をうししとあらし

吉木に文のあらしとあらしと現

花をのびとあらし

此の図新撰画鑑初巻第一巻

：氣をひき

画と挿毛い何とあらし風流の

リ素人画をうしとあらし

改しきま也

一 善哉善哉子経歴回

東大寺山花本殘闕

山名貫義より今の花名

帰しとすとの

山名貫義の體をよそとす所を
美のちとす

昔ある所をよそとすも唐代の

畫圖を摸するしよとす

とすしよとす西を唐の西域

りゆ來の唐代画をよそとす之

んをよそ

北平をよそとす人許畫圖の上部

の三方をよそとす畫海をよそ

たのぬし

赤七知談

師月名

淡

此

赤七知談

土生先勝

軍名

此の巻の断片は方々散乱し本意
迄の跡も全く見えずあるあると
なりし一巻なることあるをある
と記し候也

方山寺巻を

一法華經圖解の

靈鷲山と云

断片

三尺許

巻頭五六七行の書字の粗大
の節

書と似て其の節と云ふ

この断片も方々の散逸しある

方山寺巻を

一十六善外圖像

佛画の中州

般舟守度十六神王撰言文
八行ありし書氣極つて
よくよくそのありし人のあり
米のりもよくよく

巻尾

長寛三年五月廿九日

由名花押印

町田石谷のつらや版佛し佛の
七北のしよ也此書殊る殊る
とくもきと年号の偽なりそ一
つ也

一 ぬ法蓮(華)巻十二

四半本一冊 三十七枚

紙々襖と張る裏紙とこの紙
も七五七 各紙々キラ

ふしりしりの折紙書々あり
光悦なき此の紙々偽なり
しりしり

此の古冊中土依信と婦人
起その圖と下巻し其上の紙
文と書ひけるあり 一え法蓮の女
の節とともふ山見貴義の書也
也 偽りぬ七

書々法蓮の書と云ふ七丸何れ
奥忍辱心法 内半枚一巻あり

は巻を女あしとまふ

は巻をせと梅介や納之成之靴の定

後花山は左大は首飾の言はる

此婦人書とてくちうと傳ふ

清筆の書するはるや物に一も

一見するは花のよふと思ひ

此本のつらまの何人もあると見え

おひるを散逸しつらんまことと

稀散のよふ也

一章一山自後山也

小幡 山也 韓大書とどの本

に似てあるものしつらんまことと

そのも 杉はるのよふのまこと 漢書

にありしが 一休のまことと

どの書とるものまことと

一 寛範書

梅おや路

二 祝讚

寛範ハ宋山徽宗宣和中の八山谷車坡
とゆと因あり瑞州清涼寺の僧也也と
東海寺の付一とし、維新の兵亂
の位職懐くも適に後福地極意
のりて歸す其の極意の米あり
評し也此の條あり文と林らあり
古書と献物とを往く東坡を
清くの如くも稀覯の福也

一 元代 鞞墨器(墨を)

四寸四方の紙に細字を認め
こころのハ片そつと原款あり
殊くしきこころあり
最古の利休田舎といふ 又別
一巻をほふ^片 松尾の閉や
江戸初考鑑定は唐外越を
いへるものも唐をほふ 唐人の
の跡ありと お院とひらき
いへるものも

一 定家之記述より西行の消息と
連綿たるもの一編

老悦の壽花と免しく

君の志甚とも老悦の志

也 志、少らば何文一軸

志

志位之消息は中御下

に及ぶ記述を

志位

志位

志位

志位

志位

志位

志位

志位

志位

志位

志位

おめあし

新井の地蔵堂

此外大寺切深修教一協法執父顯納
(久安四年御花集と證之々々) 皆寺前
皆路とす

最良の御郡の道摩國一協と親
唯路圓分川分寸の御花とす
寸許上段、他うま目等と補之の此
下印右側

江石寺子款類(林氏)寺施百協

の款類をて款類の真西の之
尤も少んきく款類の真西の之
入らむとて見よ

明治四年十一月廿六日

於大改定余 才七斤

の敦煌石室中ししむか已せる唐太宗法
 帖(宋本)の言まるとししむか已せる唐太宗法
 帖(宋本)の言まるとししむか已せる唐太宗法
 内海湖南宅に於て記する書方通勁堂
 々として帝ある書すに於て大字を義之
 も書方終し終るる書すに於て大字を義之
 々として帝ある書すに於て大字を義之
 此の法帖を唐代に刻ししむか已せる唐太宗法
 宋の書帖を傳ふるに於て大字を義之
 々として帝ある書すに於て大字を義之
 比しおのづから異なる所ありしに於て

の書帖を換するに著る義之の書法を
 了りしむか已せる唐太宗法
 知ししむか已せる唐太宗法
 且て此の書帖の書法を義之の書法と
 何れか好む書法を著るに於て此帖を温
 文館に傳ふるに於て此帖を温
 文館に傳ふるに於て此帖を温
 文館に傳ふるに於て此帖を温
 文館に傳ふるに於て此帖を温
 文館に傳ふるに於て此帖を温
 文館に傳ふるに於て此帖を温

行たるに早業に
 之れを銀に

形也 春年 濟屢 窮其神 靡覲 爲之 暄涼 幾積 其妙 難

○物多あつてはゆきとてゆきとて大波流五の事
を治す余のゆきとてゆきとて

五の流五の大波流五と三月の二月の
白の流五の四月の三月の二月の
控除の流五の四月の三月の二月の
流五の流五の流五の流五の流五の
一也 流五の大波流五の流五の流五の
の流五の流五の流五の流五の流五の
と流五の流五の流五の流五の流五の
と流五の流五の流五の流五の流五の

精力を尽して僅く草を下したるもの
 多くあり草を下したるもの二三行四行の
 きずも往々ありある流るるを一草
 も下してさうさうの流るるを
 人の一句と葉する人の数を多くし雪
 舟えんが一滴の果汁を流るるに数の
 意匠と終るるを以てて必効の苦心
 を何と僅く一二行を推す草しる其
 物を快伝をいへる推致数の一句を
 たる物とせうとて睡成を導く此る

の苦心を悲しく見るが今ある句法を
 ようとせんといふ大なる苦心を
 苦心の甚く入るるをいへる、
 此三月の睡るる流るるを
 一心命とす^たたむるの意をいへる也、
 余の一生の苦心といふ此也
 ありとせうといふ流るるをいへる也
 定むる流るるをいへる也
 此の草の草靴やいへる舟の舟を
 出せしをいへる也、
 此の草の草靴やいへる舟の舟を
 出せしをいへる也、
 此の草の草靴やいへる舟の舟を
 出せしをいへる也、

花海を、坪内漸く今までの勢いをも
竟し笑つて曰く

成るも此の十折、勸きよきの新十巻
山一行と著しも幾千田荒くは幾百田
價あり、一ふ千巻とよみ決して隆評言
にあらず、これら大編え著也、此を
歎すじしこころ、信つて書き、これと
金スじしこころ、信つて書き、信るも
地神と

西へ此の

○大畏伯坤(の)道を見え、この
念、けり、海も、道心、佛、人の、其、心、を、一
見せ、こと、を、懐、記、して、思、を、よ、も、思、の、作
目の、よ、め、る、上、の、れ、を、又、こ、の、世、に、成
り、全、と、よ、道、流、を、つ、り、津、入、心、佛、人
ハ、即、ち、成、仙、と、す、此、の、成、仙、も、成、道、の、一、
一時、也、と、す、と、い、ふ、事、も、一、時、也、と、い、ふ、事、も、
了、る、事、も、了、る、事、も、了、る、事、も、了、る、事、も、
を、女、の、家、を、め、つ、る、事、も、世、の、事、も、
實、と、信、ず、る、事、も、

感を興起して而もさうして洩る。

○ ちよちよるを浮屠あちの又つ梅月十
此一梅を嫌ふ、余もさうのく前ふまら
る客入(あともをさけは茶入ともまの
りよ之んを視を疑い！)ふふふふふふ
疑うりとは自らをささるの遊んとも
ちよの主人の好むこととをわが
と聞くと、あちのこととてあちの千の
客のことと一回讀んでさうさうさうさ
を要し、あちの客はさうさうさうさ
手前方の主人復國印もさうさうを
らにさうさうさうさうさうさうさ
し、あちの客はさうさうさうさうさ
とさうさうさうさうさうさうさ
り、さうさうさうさうさうさうさ
あちの客はさうさうさうさうさ
ことをあちの客はさうさうさ
絶の強れをさうさうさうさ
故を二の次とさうさうさうさ

手前方の主人復國印もさうさうを
らにさうさうさうさうさうさうさ
し、あちの客はさうさうさうさうさ
とさうさうさうさうさうさうさ
り、さうさうさうさうさうさうさ
あちの客はさうさうさうさうさ
ことをあちの客はさうさうさ
絶の強れをさうさうさうさ
故を二の次とさうさうさうさ

隣りあふとむしとらぬよし 併し此客の條
りせらしと暮らさるもし 余の公事やふ
しとらぬよしとらぬよし 賜也

國書刊行會

國書刊行會

○圓修神宮の御宇に於て千五百の物語を云く御記
しと居る所の其の御記の一端とも又云く
山の御記の左の一路也 何ぶこゝの事
云ひのものと居るおめり

七月十七日

流布本平家物語は直ちに文学史上の研究對象と
して採るべきものにあらず。先、その御記を詳き去りた
るが爲に事実上の連絡を絶てるおと見に灌頂巻を別
に立てたるが故に事實の重複せるところあるのみを
らず句節のわけ方の如きは学識乏しきものが漫に分
合したりと見にて不穩當なる所少からずその最甚し
きは「烽火」「聖主臨幸」「法住寺合戦」の三なり。その他内容と
名目と相違はぬものかぞるに違あらず。かくの如き書
は如何にしてもこのまゝ、文学上の作物として取扱ふ
こと能はざるものたるや論なし。

さらば如何なる本によるべきか。余は茲に平家物語の
諸の異本につきて研究したる所を以てこの間に答へ
むと欲す。

現今世に存して吾人の目に觸れたる平家物語をば、
その小異につきていはば五十種を算するに至るべく、
之を類別すれば十以上の目せ立てるべし。今余はこれ
の中大別して讀み物の平家物語と語り物の平家物語
との二つとせむ。而して讀み物が先なるべきか、語り物
が先なるべきかといはば、余は語り物が先なるべきと
せむと主張せむ。

語り物が先なるべき事は全く根據なき説にあらむ。
余は寧古來の傳説に基づきて平家物語は行長と生佛
とに端を發したるもの考らむと思惟す。而してその行
長は月輪白家司にして詩を能くすとの名ありし
下野守藤原行長なるが如く、行長の事は尊卑分服、玉葉
明月託元久詩歌合等に見ゆ。その生佛は郢曲の名家菱
小路家の人にして順徳院傳記に天下一人也と記させ
歸へるばかりの達人源資持朝臣が出家して青蓮院門
跡慈鎮和尚の坊官となり、正佛と號したるを誤り傳へ
たるもの、如し。資持入道の事は禁秘抄、禁秘抄、階梯、宇

多深氏系圖、樂臣類聚、深氏催馬樂師傳、相承、神樂血脈、和
琴血脈、素等相承血脈、舞曲相承次第、琵琶血脈、染塵秘抄、
順徳院所記、吉野樂書、玉葉山槐記、所迹抄、明月記等に見
ゆ、即文學と聲曲と兩々相待ちて二、に平家物語は成
立したりしもの、如し。

語り物の平家にまた二流あり。一方流と八段流と有
り。而して今の流布の本は皆一方流の本なれば二、に
先それらの一圖につきて述べむ。

一方流の本は灌頂巻を別ちて第十二巻の末に置き
たるものなり。その最普通なるは巻末に「一方模校以吟
味命開板者也」の識語あるものにして、余が見たるもの
には寛永三年版、正保三年版の平假名本、寛文十二年版
延寶五年版、天和二年版の繪入平假名本あり、識語なき
ものに、嵯峨本、下村本の平假名活字本、真片假名古活字
本、萬治二年真片假名版本あり。唱譜を付けたるものに
は平家正節あり。東京帝國大學本あり。文部省本あり。南
葵文庫本あり。いづれも写本なり。更に一方系統の古写
本をあげれば、官内省の藤波家献納本あり。内閣文庫の
平家灌頂本及吉田梵舜手書の本あり。東京帝國大學の
草野文學士記念本あり。帝國圖書館の京師本あり。彰考

館の康豊本（此に所謂鎌倉平盛本なり）慶長五年の写本、安藤
為実家本あり。以上の外又別に真字のみにて書ける所
謂真字本あり。宮内省本には文安三年四年の奥書あり。
内閣文庫本には文明六年の誌あり。いつれも灌頂巻を
別にせることの由来古きものたることの徴に供すべ
し。彰考館の南都異本も真字本なり。僅に一巻を存す
るのみならず、又一方の本たるが如し。記年なしといへ
ども、室町時代のものたるや疑ふべからず。

流布本に除きたるものに大秘書あり。鏡鏡叙論の三
二れなり。鏡は之を載せたる本少からず。版本にはたゞ

嵯峨本のみ之を載すれども古字本には藤波本草野本
京師本慶長本康豊本等皆之を載す。平家灌頂本はこの
外に函をも載す。宗論は上述の諸本之を載するものな
し。たゞ平家灌頂本と京師本とは目次にのみ掲げたり。
而して京師本の目次にはなほこの外に函をもあげた
り。

大秘書の外小秘書と稱するもの二あり。『祇園精舎』と
『延喜聖代』とこれなり。祇園精舎は之を載せざる本稀な
り。と雖も平家正節は之を別巻に掲げ、東京帝國大学の
語り本にはこの函には特に唱譜を附けず。文部省本に

は全く之を省けり。二れ小秘書たる所以たり。同書聖代
は平家正節に載する外一方流の本には載するを見ず。
平家奥秘によれば、流布本に載せざるところのもの
園供養と高倉院嚴島御願文とあり。御願文は平家灌頂
本に載す。京師本には目次にのみあげたり。園供養はた
だ康豊本に載するのみなり。これらの秘事を集めたる
ものに平家奥秘、平家宗論、平家物語、所文の巻あり。いづ
れも信すべきものなり。

さてこの一方本の祖たるものは何ぞといふに、余
が見る所によれば、覺一本を祖とすべし。この本は應安
四年の奥書あるものにして、覺一がその死に先だちて
生城に喫つしものと思はる。この本明に灌頂巻を分ち
て、末に附けたるもの、如し。これを寫し傳へたるは飛
鳥井雅銅、郷手書の本なり。この本には慶長十六年木村
揆校良一の署名にて、南倉素庵が代筆せる奥書を添へ
たりといふ。この本後に塙揆校の有に歸し、轉じて那須
家の藏となり、更に鮫山居の生家楠美家に贈られしと
いふ。彰考館所藏の康豊本巻五の末に塙本を載せたる
木村揆校の奥書也、影寫して附録とせり。その末に立原
翠軒が手書せる識語によれば、この本は康豊本と同一

なることを知り得、又その別巻として附したるものは
平家実秘平家宗論と同じものなることも知らるゝな
り。

康豊本亦各巻の末に増補あり。その注によれば、後小
杉天皇頃の惣一揆校に関するもの、如し。京師本も亦
これと同一にして、この二本は又慶長本と同一なる證
あるが、それらを略したる一方本の起源が少くも覺一
本にあることは争ふべからず。ただこれよりも溯りて
一層古く、今の流布本の系統を求めらるや否やは未決
の問題ありとす。

八段流は之を唱ふる事殆んど絶えて纔に月見の一
齣のみ存す。館山君は之を傳へられたり。八段流の語り
本と目すべきは彰考館蔵の八段本なり。この本灌頂の
巻を別に立つることなしといへども、大秘事たる「鏡」
はその位置をのみ示して文章を載せず、宗論に至りて
は目次にも載することなし。又別に館山君が傳へられ
たる八段流の本の目次あり。灌頂巻を別に立てず、大秘
事すべて載せたりと見ゆ。この目次によりて見れば世
に先悦本と稱する中院前中納言云々の奥書ある版本
は即八段本たるなり。

八段一方二の二流の新古は暫く措き本の體裁につきてりづれが古きと問ふ人あらば余は八段本の體裁を古しと答へむ。何と云ふば八段本も一方本も共二秘事を除くことありと雖も八段は灌頂を別にせず一方は之を別にするを以てなり。灌頂卷の性質は館山表の説あり事あれば委しくは論せざんば平曲傳授上の組織に基づくものにして文學上の意義あるものにあらず。而これ實に職業的秘訣の性質を具するものなればその成立は稍後なるものと認むるなり然りと雖も文章の上より見て一方本の方新しとはいふべからず。

余が研究によれば平家物語成立の頃の言語としては一寧一方本の方真に近しと思はるゝ證少からざるなり。況んや八段流の祖城玄は章曲を優雅にせむとして改竄し一方流の祖如一は生佛以来の祖法を變せずとの傳説存するに於りてを也。

以上の外同じく語り物の系統にして未だ一方八段の二流に分れざりし時の面影を偲ぶに足るべきものあり。帝國圖書館の九冊本二れなり。この本は確に一種の語り本にして一卷十句総計百二十句あり。その灌頂卷を別に立てざる事は八段本に同じく大秘事の如き

は大抵之を載す。たゞ載せざるものは堂供養の一のみ
なり。これに似たる本は彰考館の鎌倉本(護考館所蔵 盛衰本)
なり。九冊本とこれとは共に宗論をば洞沙葱嶺の事と
して第六卷に收むるを異なりとす。(他の本は宗論を二
の本又才十二卷の末に小秘事たる廻臺聖代を附す。)

彰考館所蔵の如白本東寺本南都本は語り物と曰す
べきか、読み物と目すべきかは未決し難し。如白本は堂
供養を載するところ康豊本に同じく宗論を載すると
ころは最古き様を呈し、全體は八段本に似たり。恐らく
は二流分裂以前の姿存るべし。東寺本南都本は殘闕な
りといへとも大秘事は悉く之を載せ、組織は八段本に
似たり。特に南都本は一層古き姿あり。

平家物語は先語り物としてあらはれしものなるが
故に、読み物としてその平家物語は必その後にあるべき
事從て多少の増補あるべきは自然の勢なり。確に読み
本としてあぐることを得るものは長門本と盛衰記と
近慶本となり。長門本が普通の平家物語を増補して綴
りたる事は異論なき事なりと、盛衰記に至りては異
説紛々たり。せんと、數本を集成したる迹顯著なると灌
頂卷を別ちて末に附けたるとによりて、平家物語の後、

しかり灌頂卷分立以後の本を基としたること明なり。
長門本また然り。この故にこの二種を一方流の読み本
と稱すべきものならん。

迎慶本は現存平家物語のうち最古き奥書あるもの
なり。この本明に二三種の平家物語を集成せしものな
れば平家最古の本とはいふべからず。されど平家物語
の研究には頗貴重なるものなり。組織は即八段本以下
の諸本と同じくして灌頂卷を別にすることなし。この
本六卷たるを命ちて十二冊とせり。平家原本の卷数以
て推すに足る。

灌頂卷を別にせざる本は古代御前の斬られし平家の
嫡流断絶することにて終る。これ實に平家の始終を明
にしたるものにしてその名に背かず。原本平家の没二
んにて偲ぶべし。たゞ迎慶本のみは平家の亡びて源氏
の業ゆゑを説きて卷を終ふ。源平盛衰記の名を與ふべ
くば、今の盛衰記よりも迎慶本の方遙に適切なるを覺
ゆ。

されど、盛衰記とて新しきものにあらず。太平記に覺一
が語ゆる平家とて頼政に菅蒲の前を賜はる事を載す。
この事は盛衰記以外いづんの平家物語にも載せぬ事

なれば、その平家とは盛衰記の原本か、然らずば、二水に
近き本なりしことは疑ふべからざるなり。

明治四十三年六月二十八日 山田 孝雄 識

おもかげ

早稲田大學
市嶋謙吉君

◎君の居は牛込の赤城山下、君の書齋は即ち客を延くの處、楯間には山陽の和字額もある、聖武朝より鎌倉時代に亘る古經の一行切を五十餘枚張りたる額もある、楊惺吾の大字額もある、床には近く京都から得られたと云ふ御里恭の琴明を散し書せる一幅を懸け、書架には古銅器、陶磁器、印材、佛像等を雜陳する處、君の趣味が如何に多方面なるかと窺はれる。たゞ不審に堪へざるは、最も圖書趣味を有する君の書齋にして、室内一部だも典籍を見ざる事て、曾て君に問ふに此事を以てすると、君は無造作に「ナニ圖書は圖書館の書齋にあるサ」

◎斯の如く洒脱な多方面の趣味ある主人公であるから、來客の種類も頗る多方面である。學者なり政客あり商人あり書生あり新聞記者ありと云ふ様に、訪客四五必ず坐に在りて、君は之れを

一室に會し、城府を設けず快瀾に談笑す。君の坐談は一種の趣味があつて、特に近來ますます老熟の域に入つたやうである。三月以來大阪へ出張し、早稲田大學の爲め十萬圓の資金を募り、漸く兩三日前後京された譯で、其慘憺たる苦心は、主人自ら大阪春陣から夏陣迄の戦争には随分手痛く働いたと謂はるゝ事でも察せられる。

◎何か面白い話はあるませぬかと問ふと、君は莞爾として「別段面白い話もないが、時に大阪から歸り勿々坪内君に逢つて、吾輩は、十餘日間の滞坂中一生一代大苦心の著作をした、處が之は一頁八行の野紙十枚にも充たぬものは、極めて短篇だけれども、實に苦心慘澹精力を盡したもので、一日僅かに一二行の書けるともあり、又兩三日に涉つても一筆だに下し得なかつたともあつて、恰も詩人が一句を案するに數



日を費し、雪舟などが、一滴の墨汁を落すに數日の意匠を凝らしたと同一であつたと話すと、坪内君の事だから眞面目になつて、ソレは定めて面白からう是非見せて呉れぬかと云ふ。時に吾輩が携へて居たカバンの中から、十萬圓の募集基金名簿を取出して、之れだとして示すと、君は一見手を拍て、成る程之は太したものだ、一行と雖も幾千乃至幾百圓の價がある、一字千金と云ふ事は決して誣言ではない、實に大篇名著だ、詩は韻スピレーションに依て書くが、君のは金スピレーションに依つて書いたものだ」と云つて、兩人哄笑したアハ、ハ、

◎早稲田大學の經營に就ては、君常に學長高田博士を助けて渾身の熱誠を注いで居る。世多く早稲田の三博士を稱す、高田氏の政治、坪内氏の文學、天野氏の經濟、是實は早稲田のオignonチーであらう、然れども事實經營上の大功勞者と云つたら、全く高田學長と君とを推さざるを得ない、其の凡ゆる

方面に關係を有し、適く行として可ならざるなき君の人格と努力は決して三博士に譲るものではない。
◎君少壯酒を嗜む事甚しく、其爲め一時健康を害したので、断然禁酒し、爾來杯中の趣味に代ふるに凡ゆる形而上的趣味を以てせしより、身体の健康は勿論、趣味鑑賞に一家の見識を開拓し、所説往々先人未發の域に達することがある。

北田おぢさん

◎京都の府上同書館本湯
浅まひり耳の語次えん
毒十文字大急のや、毒十文字
皆ささるる毒のたふきあ
を集めしえんと目次浦え大分
昔辛一とさめれとさあ其の
曲あつとらぬえんあき
ゆふまわつとさる文縁の夜
り、整えれ朝籠人の代書
の雅、おぢさん、おぢさん

義徳の氏鑑を以ての鑑味方の物たるの
神人、きりしとらぬ味方
とやうな、おぢさん、おぢさん
ん天乳寺、おぢさん、おぢさん
るは、おぢさん、おぢさん
え、おぢさん、おぢさん
の、おぢさん、おぢさん
十、おぢさん、おぢさん
る、おぢさん、おぢさん
あ、おぢさん、おぢさん

存しと長きものもいと早しと
あつたものも増えつたものも
ふつとつと大方との方の氣を
い、えん、お、し、早、く、あ、つ、た、日、を、
本来増えを先んずる、中風、
る、と、先、ん、ず、つ、と、あ、つ、た、と、あ、つ、た、
感、せ、つ、と、と、あ、つ、た、と、あ、つ、た、
ま、つ、た、と、あ、つ、た、と、あ、つ、た、

○聯名の唐紙に縦書きする日本秋の
の古紙を前よりの面よりしと改紙しつと

の折柄此の一回し聯名の紙に横の横
ちしる古紙一二を得る、
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
下の人也を念を、一軸と、
縦横のま、

の端飾物、加納紙、
紙、の、四、角、の、紙、の、中、に、
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
十、数、の、と、と、と、と、と、と、と、と、

ふあ何に不致りてしと書回刊と其の表
西の格をそ一突の所七格と聞らう其
の因いふもさあ

○米の格を移り格を然社まへ其の建物
と人さるの中とそ其格の大度、意匠を
けさるゝのまじし、染草と其の使らるゝ
をうしとせられまう然りてしこも為す而
しと人さるゝ外の入るを其格をさるゝ又
中格の口を減しと其の社の格と云ふ
かあらぬは、其格を起りては、其格を

ふつとし、其格のあつと書、清浄又も
物とて、其格のあつと書、清浄又も
可なりと断し、其格のあつと書、清浄又も
社社の格を、其格のあつと書、清浄又も

直腹

あつと書、清浄又も

一足

書回刊



書回刊

四十三号 七月廿五日

○桂國打撃法地出し韓鏡五面と終ら
る各々其の如と異なり一皆之を合するを
とてしし浦おこち院と云ふ所の事と
村田王法と云ふ所の事と比するを他
にありし事院の如くは王家の事なり
むとてししと云ふ事なり

○其由震卯高院殿の本を全書
及び北内高院殿を敗りし事院の
事とてししと云ふ事なり
の事院と云ふ事なり
らんことをいふ事なり

○英國マニチエスナーの古典圖書
の事院と云ふ事なり
新書と云ふ事なり
後記念の事院の事なり
ラントの事院の事なり
族の事院の事なり
とてししと云ふ事なり
スベンサーの事院の事なり
利の事院の事なり

契丹の兵大嘗て来りて其を斃す歟祖南行
難を避く丹兵松岳城に入て退く
於是君臣を上の大統を乞し大統死
を刻成りたる後丹兵自之退くとあ
り、（此の事は）多岐氏の刻刊
ハ歟宗のゆゑなり歟
（清譜）の
報の述むる達旦の焚く所と云ふ四王歟宗
の事と云ふ倣ふに改刻し其の事と云ふ也
左の祈告文全文を抄録す

大花刻板君臣祈告文 輯行

國王諱謹与太子公族伯宰杞文虎百寮等熏
沐齋戒祈告于盡虚空界上方無量諸佛菩薩
及天帝釋为首三十三天一切護法靈官甚矣
達旦之為患也其殘忍凶暴之性已不可勝言
矣至於癡暗昏昧也又甚於禽獸則天豈知天
下之所敬有所謂佛法者哉由是凡所經由無
佛像梵書悉焚滅之於是符仁寺之所藏大藏
經板本亦掃之無遺矣嗚呼積年之印一旦成
灰國之大寶喪矣雖在諸佛多天大慈之心是

可忍而孰不可忍耶因竊自念弟子等智昏識
淺不早自為防戎之計力不能完護佛乘故致
以大寶喪失之災實弟子等無狀所然悔可追
哉然金口王說本無成毀其所寓者器耳器之
成毀自然之數也毀則改作亦其所也况有國
有家崇奉佛法固不可因循姑息無此大寶則
豈敢以後鉅事殷為慮而憚其改作耶今與宰
執文虎百僚等同發洪願已署置句當官司俾
之經始因考厥初草創之端則昔 顯宗二年
契丹主大舉兵來征顯祖南行避難丹兵猶屯

松兵城不退於是乃與羣臣發無上大願誓刻
成大藏經板本然後丹兵自退然則大藏一也
先後雕鏤一也 君臣同願亦一也何獨於彼
時丹兵自退而今達旦不爾耶但在諸佛多天
鑒之之何如耳苟至誠所發無愧前朝則伏願
諸佛聖賢三十三天諒愍迫之祈借神通之力
使頑我醜俗斂蹤遠遁無復蹈我封疆于戈載
戰中外晏如母后儲君享壽無疆三韓國祚永
永萬世則弟子等當更努力益護法門粗報佛
恩之萬一耳弟子等無任懇禱之至伏惟炤鑒

云云

東園在相國全集卷第二十五

國書刊行會

國書刊行會



大改朝の儀
七月廿八日
所載

馬羅に入るに日最初の使節の迎の圖

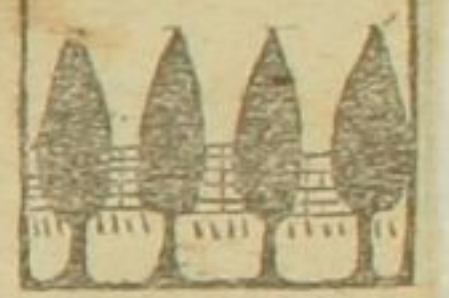
伊國のザエニスにけるサマタリヤの寺の飾

(第三節の西尼殿古碑參照)

國書刊行會

國書刊行會

第一世界
第二回



威尼西の古碑

(日向伊東氏の遊踪)

予嘗て明治六年に於ける岩倉大使一行の官遊を記せし米歐回覽實記に、威尼西のサンタマリヤ寺の壁に日本使節の古碑あり、羅何文にして讀む可からず、唯一千六百三十年(寛永六年)の字辨すべしとあるを讀み、此の行威尼西に到らば、必ず此の寺を訪ひて一拓本を獲んことを樂み、且天正度の大友大村なんどの使節、慶元の際なる伊達政宗の使節を除きて、外敵嚴禁後の寛永度に使を羅馬に遣はしけんとは、如何なる遺聞にやと心竊に不審を抱きつ、威尼西に入るや、先づ大夢を介してサンタマリヤ寺の東道を曼的利に囑せしに、何ぞ圖らん威尼西にはサンタマリヤといふ寺多く、案内書に見ゆるのみにて五箇寺ありて、何れが古碑の在る所とも知れず、唯ホテルの前面なる

サンタマリヤ寺とありしことを藤麗氣に記憶したりしを便に、十九日の夕方ゴンドラを飛ばして對岸のサンタマリヤ寺を訪ふ、此は千六百六十年の創立にて、疫癘終熄の報恩に立てし寺なり、曼的利は寺門を叩きて住僧に事の由を告ぐれども知らずといふ、扱は此處にてはあらざりけりとして、左思右考の末、グランドホテルの側にもサンタマリヤ寺あり、必定彼處なんめりとして、棹を轉じて彼岸の寺を訪ひしに、折しも夕方の説教の最中なりしが、寺いと小さくて、四壁を見廻らせども、其と覺しきもの、ありさうにもなし、失望して旅館に歸りしが、曼的利概然として探訪を自任し、アルチーフ圖書館長に一書を致して其の所在を問へり、翌日答書來り、此の碑も今の美術學校の處に建てりしサンタマリヤ寺に在りしを、廢寺の際、昨日訪ひしサンタマリヤ寺に移して、其の學寮の壁間に嵌せりとなり、扱は昨日最初に訪ひし寺なりけるを、寺僧も、斯るものありとは知らずやありけん、住僧に知らぬ程なれば、邦人の訪ひ來りしも少かりけんと推測られて、

神往益切なり、翌二十日の午前大夢と共に例のゴンドラを雇ひて、重ねて彼の寺を訪ふ、彼の圖書館長の答書を寺僧に示して、古碑の所在を問ふに、甲僧知らず、乙僧知らず、丙僧丁僧も知らず、衆僧英語を解せぬより、大夢折衝に由なく茫然たりしが、英語を知れる法師ありとて、樓上に響け出すもあり、甲僧は兎も角も壁間の碑版を検せんとして、仔細に點檢しゆくうち、彼は忽ちヤホンニノと絶叫しつ、いと高き壁上一碑版を指せり、大夢も予れも覺せず手を拍ちて快を叫べば、群がり來りし衆僧も一時に拍手せしさま、沙漠に水を得たらんが如し、手れ楯子を借りて、例の墨もて描らんとせしに、碑版は三尺四方許りの大さにて、予が携へたる半紙にては足らず、且高處に在りて一人の方には摺り得難く、深く憾と爲し、色を見て取り、漸く走せ着きし英語僧は、寺の記録にも載録しあらんとて、樓上より一小冊子を携へ來りて點檢せしに、果して碑版の全文あり、大夢買取らんと云ひしに、彼は快よく一本を贈れり、因つて予は其の一部分を摺取り、全文は追つて寫眞を旅館に託せん

とて、其の由を寺僧に告げ、深く其の厚意を謝して旅館に歸れり。此の文は伊太利古文なり、曼的利は伊太利人として、其の大意を英譯し、大夢重譯するに邦文を以てす、其の文に曰く。日本人の喜捨を謝する文

廣く世に行はれんことを歸命禮。千五百八十五年(本文は伊太利古文)此は米歐回覽實記に説く所の千六百三十年の碑と同じからず、或は此碑の外に別に千六百三十年の碑あるに非ずして、年號の誤りにあらざりしか、千五百八十五年は即ち天正十三年にして、大友宗麟が使節を特派せしは天正十年に在り、彼のチゼン國王と云へるは、肥前の大友氏を言ふなるべし、而して大友、大村、有馬の三使節は同時威尼西を過ぎたりと見ゆ、

初の使節の古碑を観る、此の行の眼福營に新文明の光のみならず、アルチーフ圖書館には、大友文書支倉文書等數を藏すと聞きしも、出發の時刻迫りて觀るを得ざりしは、此の行の一憾事たり。

名門高官なるシユリヤノナカルワ、マルチノヤラの數人は、前記各國王及び從臣等の代表者として、地球の他の半球の一端なる日本より來りて當寺の學校を訪ひ、大徳カルチナルベツサリチチによりて納められたる神の遺物を禮拜し、彼等歸國の後、當寺の名によりて其の國民の間に聖教を流布せしむるの善行を勤めんと誓ひたり、依つて當寺は儼かなる儀式を以て彼等に名譽の法帽を贈與し、其の信心を表せり、願はくは此の功德を以て聖母の慈仁に益

彼の法王宮の壁畫は亦此の人にこそ、伊東萬千代を日向國王豊後國王の甥にして、筑後守馬侯の從弟としたる、飲肥伊東子爵の系圖に對照せば知る由もやあらん、彼の法王宮の壁畫なる日本の三使節は此の三人にして、肥前大村の使臣は同行にあらざりしか、壁畫の裝束いと異なりしは、此處にて贈られし法服を着たりし姿にもや、然るにても三使節が先づ遊踪を此地に印せしは、風のまにまに來泊せしにこそ、所謂學校は古のサンタマリヤ寺附屬の學林なりけんことを思はるれ、羅馬に壁畫遺書を見て、威尼西に日本使

國書刊行會

國書刊行會

以下全て
白紙

